

# 令和7年度 第104回 全国高等学校サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

## 1 大会概要

12月28日（開会式・開幕戦）から1月12日（決勝戦）の期間に開催された。国立競技場で行われた決勝戦のカードは、ともに初の決勝進出となるプレミアリーグ WEST 所属の神村学園高校（鹿児島県）が、プリンスリーグ関東1部所属の鹿島学園高校（茨城県）を3-0のスコアで下し、初の優勝を果たした。神村学園高校は今年度夏の全国高校総体も制覇しており、100回大会の青森山田高校以来6校目の快挙を達成した。また、3位には尚志高校（福島県）プリンスリーグ東北と流通経済大柏高校（千葉県）プレミアリーグ EAST 所属の2チームが続いた。ここでは、本県代表の昌平高校の戦いぶり、優勝校分析、大会全般のトピックスについて述べたいと思う。

## 2 埼玉県代表昌平高校

2年ぶり7度目の本大会出場となった昌平高校は2回戦からの登場で、相手は高知高校（高知県）だった。高知県予選を無失点で勝ちあがった堅守が持ち味の相手に対し、前半7分にMF⑩山口の個人技による芸術的なシュートで幸先よく先制する。17分にも長いランニングからMF⑦長がペナルティエリア内でボールを受け、飛び出してきたGKまで躲して冷静なシュートを放ってゴールネットを揺らし、リードを広げる。その後もテンポの良いパス回しとドリブルで相手に守備の的を絞らせずに効果的に追加点を重ね、4-0での快勝となった。

つづく3回戦の相手はプレミアリーグ WEST 所属の帝京長岡高校（新潟県）。前半15分に右サイドを崩され、最後はMF⑳樋口に先制点を奪われてしまう。その後押し込む時間は多いものの、帝京長岡高校の1トップを残した9人のフィールドプレイヤーの帰陣が速く、ゴール前の密集地帯を突破することができない。帝京長岡高校は昌平高校の中央突破を狙った縦パスやドリブルをカットすると、後半開始から投入されたU17日本代表の経歴を持つ1年生FW⑨児山をターゲットとして堅守速攻の姿勢を見せる。リードした帝京長岡高校の選手は、シュートで攻撃を終える意識が強いため、昌平高校はカウンターで得点機を作ることができない。帝京長岡高校は後半途中から中盤の守備強度を維持するために効率よく交代カードを切っていく、ゲームをコントロールしようとする。昌平高校はボールポゼッション率で上回りながらも最後までゴールを奪うことができず、ベスト16で終戦を迎えた。

## 3 優勝チーム分析

神村学園高校は初戦の東海学園高校（愛知県）戦から決勝の鹿島学園高校戦まで計5試合を戦い抜き、18得点2失点と抜群の攻撃力を発揮しての優勝だった。基本システムを1-4-3-3とし、両SBが積極的に前線まで駆け上がり攻撃に幅と厚みをもたらす。3トップはドリブルで相手を引きつけてチャンスメイクに長けた⑪徳村と、選手権得点ランキング1,2位の⑬日高・⑨倉中が常に相手の脅威となり続けた。波状攻撃を可能にしているのが即時奪還の意識。奪われた瞬間に前線の選手もプレスバックして不動の中盤3枚（⑥堀之口⑭福島⑮岡本）と挟み込み、放り込んでくるボールに対してはキャプテンCB⑤中野を中心に制空権を渡さない。また、夏の全国高校総体で5得点をあげたMF⑩佐々木が控えに回り、途中から試合の流れを変える存在感を発揮した。もっとも接戦となったのは東西プレミア対決となった準決勝。開始早々尚志高校に豪快なヘディングシュートを決められると、その後もポストに当たるシュー

トを打たれるなど劣勢が続いた。しかし 73 分、再三の攻撃参加を見せていた左 SB⑧荒木のクロスに対して、⑬日高が相手の前に体を投げ出し、倒れこみながら執念のヘディングシュートを決めて試合を振り出しに戻す。PK 戦を制しての決勝進出となった。激闘を乗り越えて進んだ決勝では、持ち前の攻撃力が爆発し、3-0 で快勝をおさめての初栄冠となった。

#### 4 大会の全般

近年同様に今大会においてもセットプレーから多くの得点が生まれた。大会を通じて 160 あまりの得点があり、そのうち 32 ゴールがセットプレーの流れから生まれたものであった。約 20% という数字が表すとおり、やはり現代サッカーにおいてセットプレーの重要性を裏付けるものとなった。いっぽうで、スローインの流れからのゴールは 102、103 回大会の 6 ゴールから 3 ゴールと減少しており、どのチームもロングスローに対する守備対策を入念に練ってきていることが推測される。この数字に関しては次回大会以降も注目して追っていく必要があるようである。また、ベスト 4 に進出チームはそれぞれ 4~6 試合を戦っている(尚志⑤・神村学園⑤・鹿島学園⑥・流通経済大柏④)が、セットプレーの流れから失点したのは鹿島学園の 1 失点のみであったことから、上位進出を果たす 1 つの重要なファクターといえそう。

今大会出場 48 校の内、19 校が都道府県リーグ所属校で、そのうち初戦を突破したのは 5 校であった。(うち、堀越高校[東京都]と大分鶴崎高校[大分県]は対戦した高校も県リーグ) さらにベスト 8 まで勝ち上がったのは日大藤沢 1 校のみだった。いっぽうプレミアリーグ所属チームは 8 チーム出場しており、ベスト 8 まで半分の 4 校が勝ち上がってきている。また、全 47 試合のうち 4 点差以上となった試合は 11 試合。いずれも上位カテゴリーの所属するチームが勝利し、8 試合はプレミアリーグ所属チームの試合(◆のカード)となった。(以下参照)

- |                               |                             |
|-------------------------------|-----------------------------|
| ・尚志(プリンス東北)対高松商業(香川県 1 部)     | ◆帝京長岡(プレミアリーグ)対大社(島根県 1 部)  |
| ◆神村学園(プレミアリーグ)対東海学園(愛知県 1 部)  | ◆東福岡(プレミアリーグ)対秋田商(秋田県 1 部)  |
| ・鹿島学園(プリンス関東 1 部)対新田(愛媛県 1 部) | ・堀越(東京都 1 部)対宇治山田商(三重県 1 部) |
| ◆青森山田(プレミアリーグ)対初芝橋本(和歌山県 1 部) | ◆北海(プリンス北海道)対大津((プレミアリーグ)   |
| ◆昌平(プレミアリーグ)対高知(プリンス四国)       | ◆神村学園(プレミアリーグ)対水口(滋賀県 1 部)  |
| ◆流経大柏(プレミアリーグ)対大分鶴崎(大分県 1 部)  |                             |

この結果からもわかるとおり、所属リーグの上下関係が大会全体での勝敗に大きな影響を及ぼしていることがわかる。もちろん短期間における開催で、チームの勢いや負傷者等の影響でいくつかの試合でアップセットが生じたことはあったものの、大勢としてはやはり日常において繰り返し実施されるリーグ戦における強度の差がトーナメント形式の大会においても出ているといえる。

#### 5 おわりに

今大会においても、リーグ戦の序列がトーナメントにも反映されたといえる。埼玉県からは地域リーグ以上に高体連所属チームとして昌平高校(プレミアリーグ)、西武台高校(プリンス関東 2 部)が参戦している。昨シーズンは東京成徳大深谷高校が S1 リーグを制覇し、関東参入戦に挑んだが、あと一步のところまで FC 町田ゼルビアユース(東京都)に阻まれ昇格を逃した。埼玉県が選手権大会において日本一から遠ざかっている現状を打破すべく、2026 シーズン以降、県内すべてのチームが切磋琢磨し、埼玉県リーグからより上位のリーグへ参入できるように期待を込めつつ結びとしたい。